

十人十色を楽しめる人に

2年 Y・Mさん

私はヘビが好きです。特に好きなヘビはタイコブラという毒ヘビです。神秘的な動きやうつろな目は言葉で表せない独特な世界を創り、私はすっかりヘビの魅力に夢中です。ですから、「毒ヘビの子であるブハーと仲良くしない」という周りの友達や気持ちは私には分かりません。私だったら積極的にブハーと仲良くになりたいからです。「毒が怖い」という気持ちは私も同じです。しかし、「怖い」よりも「知りたい・見たい」という好奇心が勝るのです。「毒を持つ」というブハーの一部分のみを見てブハーを否定する場面は、私の中に非常に悲しい印象を残しました。まるで「ヘビが好き」という自分自身も否定されたような気持ちになりました。

ブハーが友達と遊ぶために自分を犠牲にしながら様々な努力をする場面では、「私が一緒に遊ぶから大丈夫だよ」と大きな声で叫びたい気持ちになりました。ブハーが自分の具合を悪くしてまで頑張らなくても、ブハーの有りのまを好きでいる私をブハーに知ってもらいたいとさえ思いました。

私はこの本を読みながら、「友達と仲良くなりたいたい時、どこまで我慢して友達に合わせるべきなのか?」、「我慢し続けてでも仲良くすべきなのか?」を自分なりに考えてみました。「はじめまして」でも、既に「仲良し」でも一緒に何かをする時には「ゆずり合い」の心が必要なのは当たり前です。「ゆずる」と「我慢」は似ていますが、私の中ではハッキリとした違いがあります。「ゆずる」は相手を思いやる優しさ、我慢は自分自身を抑えることだと思っています。何回も「ゆずる」を続けていると、いつか「ゆずる」が「我慢」となり、いつかは我慢の限界が来ます。「ゆずり合う」関係は長続きしますが、「我慢する」関係は続かないということが私の日常生活で常起きています。それは「1人の妹との関係です。お風呂へ入る順番、エレベーターのボタンを押す順番、バスや電車の座席など、どうでもいい小さな出来事を妹はゆずれないのです。私が「ゆずってあげる」ことを当然と考え、「ゆずり合う」気持ちを持たないため、私の気持ちは「ゆずる」から「我慢」と変化し、最後には怒ります。姉妹げんかへ発展します。結局、仲良くできずに二人とも母に怒られます。物語の中のブハーも我慢に限界がきて、大好きな友達を危険な目にあわせてしまっています。したがって、私の結論は「我慢し続ける関係は長続きしない」です。仲良くしたくても仲良くできないのが現実だと思います。仲良くできるのは、ありのままの自分を認めて理解してくれる関係、お互いにゆずり合える関係、つまり優しく持ち合える関係なんだと思います。この本を読み終わり、我慢を続けるのではなく、「今の自分」をまずは自分自身が認め、相手にも認めてもらうことで良好な関係が続いていくのだと分かりました。自分と違う考えを持つ人や自分と違う文化を持つ人に出会った時には、相手のことを理解しようという心や自分と違う文化を持つ人に出会ったと、相手と自分の双方を尊重できる人になりたいと思います。十人十色という言葉の通り、人はそれぞれ違っていて当たり前なのです。自分を含め、それぞれの人の違いを楽しめるようになったならば、きっと私もブハーと同じく堂々とした立派な大人になれるだろうと思います。